



8月に想う “其の一”

7月28日(木)からの夏休みも8月21日(日)で終わり、22日(月)から授業が再開します。とはいうものの3年生はすでに補習等が始まっており、校内には先生方の声が響いています。コロナ感染状況も非常に心配ですが、3年生にとってはこれからの最も大切な時期、頑張ってもらいたいと思います。



8月も下旬となりましたが、この「八月」は、日本にとっては非常に重要な「月」だと思えます。昨年1月に亡くなった作家の半藤一利氏が、以前信濃毎日新聞にある俳句を紹介していました。その俳句とは、

『八月や六日、九日、十五日』

です。作者不詳ということですが、俳句の世界では有名な句とのこと。77年前のそれぞれの日に何があったのかを説明する必要はないと思いますが(8月6日が広島原爆投下日であると答えられた人は全国で30%以下との調査結果もあります)、77年も経つとあの戦争の“記憶”が風化し、“記録”となっていくことに一抹の不安を感じるとともに、昨今の国際状況を踏まえるとさらに大きな脅威を感じざるを得ません。

本校の同窓会誌にも、8月15日当日の様子を詠んだ高松歌会職員短歌同好会の短歌が記載されています。

「八月の真陽のさ中に立ちつつも寒々として汗流れぬ」

「道を行く人物言はず村役場人気なくして夕となりぬ」

平和の大切さ、平和の脆さ、平和を維持することの困難さ、戦争の悲惨さ、人間の愚かさなど、様々なことを考えさせられる「八月」です。

8月に想う “其の二”



高校時代は弓道班に所属し活動していました。当時の弓道場は、現在の小体育館とプールの辺りにあったと思います。夏になると“地獄の合宿”(確か2泊3日だったと思います)がありました。この合宿中は弓道班でありながら、弓矢を持っての練習よりも、「弓道は足腰の鍛錬が重要」との教えに基づき、ひたすら体力向上のため

のトレーニングをしていました。例えば、朝夕の飯沼神社の階段5往復や階段ダッシュ、鈴岡公園までのランニング等です。

夏休み中、蝉の鳴き声が響き渡る飯沼神社の300段余りの階段を40数年ぶりに登ってみました。高校時代、先輩の叱咤激励?の中、最後は四つん這いで登り切ったあの苦しく、しかし何とも言えない達成感に満ちた「夏の合宿」のことを懐かしく思い出しました。

